



国指定・県指定の新指定文化財

【国史跡】

旧三井三池炭鉱跡

宮原坑跡

万田坑跡

所在地 荒尾市宇蓮池250番1 他

指定年月日 平成12年1月19日

所有者 三井石炭鉱業株式会社

概要

史跡指定となったのは、三井三池炭鉱の数ある炭坑施設のなかの、福岡県大牟田市に位置する宮原坑跡と福岡県大牟田市と熊本県荒尾市にまたがった万田坑跡の二か所が一括指定となったものです。

特に万田坑跡については、明治期の炭坑施設として採掘から出炭までの一連の施設がよく残されていて、炭坑施設としては我が国で唯一の史跡となっています。

なお、主な施設については平成10年5月1日付けで国重要文化財の指定を受けています。(16・17号参照)
我が国の近代化の牽引役として大いに活躍しましたが、昭和26年に採炭を四ツ山坑へ引き継いだ後は、管理のために平成9年(1997)3月の閉山まで使用されました。



史跡内の重要文化財(平成10年5月1日付け)の建物群



旧三井三池炭鉱跡 宮原坑跡・万田坑跡

航空写真(平成7年撮影)

【県指定重要文化財（歴史資料）】

補陀落渡海供養塔 1基

附 石塔群 3基

所在地 玉名市繁根木73-1

所有者 繁根木稲荷神社総代 井本利明

指定年月日 平成11年3月17日

概要

補陀落渡海供養塔及び石塔群は、繁根木八幡宮裏の稲荷山古墳の上にある繁根木稲荷神社の境内にあります。

補陀落渡海供養塔は、地上高がおよそ138cmのやや扁平な自然石で造られています。

同供養塔には阿彌陀三尊像が線刻され、また、銘文によれば永祿8年（1565）11月18日に下野国弘願上人が観音菩薩の浄土である補陀落へ出帆したことが分かり、熊野以外で渡海行が行われたことが知られるものです。

なお、同所には戦国時代の板碑2基と鎌倉時代の宝塔の塔身があります。



補陀落渡海供養塔（拓本図）

【県指定重要文化財（歴史資料）】

宇佐八幡宮関係石造物群（報恩寺跡） 7基

所在地 玉名市伊倉北方3319番地

所有者 東弘典・伊倉北方共有

指定年月日 平成11年10月29日

概要

本堂山（通称）と呼ばれる報恩寺跡には、文応元年（1260）から建武3年（1336）までの銘を持つ7基の石造物があります。

石造物群のなかには「伊倉本地主／宇佐公満墓」や「伊倉保一方地頭沙弥／行恵往生極楽」などの銘文がみられます。宇佐八幡宮との関係を示す貴重な石造物群です。



宇佐八幡宮関係石造物群

【県指定重要文化財（歴史資料）】

補陀落山渡海供養塔及び板碑群（報恩寺跡） 10基

所在地 玉名市伊倉北方3319番地ほか

所有者 玉名市・伊倉北方共有

指定年月日 平成11年10月29日

概要

補陀落山渡海供養塔及び板碑群は、報恩寺跡にあります。

補陀落山渡海供養塔は、地上高がおよそ125cmの自然石で造られています。

同供養塔には阿彌陀三尊の種子が刻まれています。銘によれば、天正4年（1576）8月彼岸、下野国夢賢上人と尾州の月照上人が観音菩薩の浄土である補陀落へ出帆したことが分かるものです。玉名市繁根木の供養塔とともに、当時の補陀落信仰をうかがい知ることのできる貴重な石造物です。



補陀落山渡海供養塔

また、同所には16世紀から17世紀にかけての板碑があり、肥後北部における板碑造立を知るうえで学術的に重要なものです。

【県指定重要民俗文化財】

西福寺の庚申塔 1基

所在地 熊本市小沢町

所有者 西福寺

指定年月日 平成11年3月17日

概要

庚申塔は、60日に一度巡りくる庚申の日に無病息災等を願い徹夜で祭神を祀った庚申信仰により建てられたものです。西福寺の庚申塔は、庫裡のそばにあり偏平な安山岩の自然石でできています。裏庭の築山にあったものを、現在地へ移したときに割れたので補修されています。

庚申塔の地上高はおよそ136cm、厚さ15cm、最大幅は76cmあります。偏平な石面の片側に阿弥陀三尊の早來廻り像を線刻しています。

左側には「于時明徳八天（一四九九）丁未八月日 庚申講一結集歌白」とあり、図像の下には「道清」をはじめ21名の講衆（庚申信仰をしている仲間）の名前が刻まれています。庚申塔は、江戸中期に最も多く建てられたもので、熊本県下には1000基を超える庚申塔が現存しています。本塔は、熊本県で最古の庚申塔です。また、全国でも10指に入る草創期の庚申塔で、学術的にも大変貴重なものです。



西福寺の庚申塔（拓本図）

【県指定重要民俗文化財】

球磨地方の臼太鼓踊り（庄屋）

所在地 球磨郡深田村庄屋

保存団体 庄屋臼太鼓踊り保存会

指定年月日 平成11年3月17日

概要

球磨地方を中心に広く分布する臼太鼓踊りのひとつで、その由来は不明ですが、源氏に敗れた平氏の残党が都を恨んで神に奉納したと伝えられています。

庄屋の臼太鼓踊りには、「雨乞い踊り」「道踊り」「本踊り」があります。

特に「本踊り」は、深田阿蘇神社の秋の例祭に奉納されるもので、所要時間は2時間30分ほどになり、球磨地方に残された臼太鼓踊りのなかでも良く形態を伝承しています。



球磨地方の臼太鼓踊り（庄屋）

文化財建造物の登録について

平成8年10月1日付けの文化財保護法の一部改正に伴い、これまでの指定制度の他に新たに建造物の登録制度がスタートすることになりました。

対象物件は、住宅・事務所・工場・社寺・公共建築・橋・トンネル・水門・堤防・ダム・煙突・堀・槽などの建造物で築後50年を経過し、「一 国土の歴史的景観に寄与しているもの」、「二 造形の規範となっているもの」、「三再現することが容易でないもの」のどれかに該当するものであれば、登録の資格を持つこととなります。

登録物件は、外観を大きく変えなければ内部を改装し、ホテルやレストランなどに改造することもできるなど、この制度は文化財の自由な活用を前提としたゆるやかな保護のシステムといえます。また、優遇措置として、敷地の地価税の2分の1減税や低利率の融資制度などもあります。

このように、文化財の建造物の登録は身近な文化財を幅広く対象とするもので、あなたの住んでいる住宅や友人の住まいをはじめ毎日通っている橋やトンネルなども、登録文化財として評価されるかも知れません。

ところで、登録原簿に記載された文化財については、写真にみられるような「この建物は貴重な国民的財産です」と铸造されたプレートが文化庁から所有者へ送られて来ます。



登録された建造物に配布されるプレート

1 早野ビル 1棟

所在地 熊本県熊本市練兵町45
年代 大正13年(1924)
所有者 早野建物合名会社
代表社員 早野房枝
登録年月日 平成8年12月20日

概要

建物は電車道に面していて、2・3階を通した窓廻りや、3～4階の窓廻りに大正期の特色が見られます。熊本で最初の貸しビルと伝え、熊本工業学校を卒業した矢上信次の設計になるものです。3階建て一部4階建ての鉄筋コンクリート造りです。



早野ビル

2 九州学院高等学校講堂兼礼拝堂 1棟

所在地 熊本県熊本市大江5丁目2-1
年代 大正13年(1924)
所有者 学校法人九州学院
登録年月日 平成8年12月20日

概要

学校の設立者ブラウンを記念して建てられたもので、設計者は、米国人宣教師ヴァーリスです。

内部は教会と同じ構造を取り、外壁は白い人造石の柱型と黒いモルタルの壁を対比させています。正面の意匠に特徴が見られます。



九州学院高等学校講堂兼礼拝堂

3 九州女学院高等学校本館 1棟

所在地 熊本県熊本市黒髪3-12-16
年代 大正15年(1926)
所有者 学校法人九州女学院高等学校
登録年月日 平成9年5月7日

概要

鉄筋コンクリート造りの建物で、設計者は、米国人の建築家ヴォーゲルです。

当時の学校建築の多くが洋風を基調としている中で、細部まで和風の装いを保った建造物となっています。

正面の一段高い列柱と巨大な日本瓦の切妻屋根などに特色がみられます。



九州女学院高等学校本館

4 熊本市水道記念館(旧八景水谷貯水池ポンプ場) 1棟

所在地 熊本県熊本市八景水谷1-7-3
年代 大正13年(1924)
所有者 熊本市
登録年月日 平成9年5月7日

概要

八景水谷の湧水地に設けられたポンプ場で、平面は正方形になっています。

外観の意匠の線取りやレンガ壁と上部のモルタル壁の取り合わせ、寄棟屋根の四方を反曲線にしたところなどに特色がみられます。



熊本市水道記念館(旧八景水谷貯水池ポンプ場)

5 水俣市立蘇峰記念館(旧淇水文庫) 1棟

所在地 熊本県水俣市陣内1-101-1
年代 昭和4年(1929)
所有者 水俣市
登録年月日 平成9年12月3日

概要

水俣出身の徳富蘇峰が郷土の子供達の修学の道を開くために寄付した建築資金一万円と、書籍一万冊を基に建設されたものです。設計者は、地元の波辺録治で、蘇峰自身も関わったとされています。鉄筋コンクリート造り2階建てで、軒廻りなどの装飾が見られますが、全体としては簡素な建物となっています。



水俣市立蘇峰記念館(旧淇水文庫)

6 長崎次郎書店 1棟

所在地 熊本県熊本市新町4-1-1
年代 大正13年(1924)
所有者 長崎次郎株式会社
代表取締役 長崎太作
登録年月日 平成10年1月16日

概要

電車通りに面した中国風の美しい建造物で、熊本では歴史ある古い書店として知られています。

設計は、東京帝国大学工科大学卒業の保岡勝也で、木造2階建、外壁はレンガ壁とし、2階の連続したアーチや軒廻りの装飾等に特色が見られます。



長崎次郎書店

7 今村家住宅 1棟

所在地 熊本県熊本市川尻4-9-21
年代 江戸末期
所有者 今村雄太郎
登録年月日 平成10年1月16日

概要

今村家は、西南戦争では薩摩軍の本陣になったと伝えられるもので、現在「明治十年戦役南州翁本営跡」の碑が建てられています。

間口6間の町家で、道路側には出格子がつけられています。この地は幕末まで肥後藩の港で、繁栄時の高級町家を代表する建物です。



今村家住宅

8 芦北町立武徳殿 1棟

所在地 熊本県芦北郡芦北町大字佐敷204
年代 昭和12年(1937)
所有者 芦北町
登録年月日 平成8年12月20日

概要

武徳殿は、昭和12年元郡代詰所跡地に柔道や剣道を行う武道場として建てられました。広い空間を作り出すための工夫として、屋根は軽量の菱形スレートを使用し、広い空間を確保するために柱は少なくしてあります。

その後の移設にともない、建物の一部が壊され玄関の付け替えが行われましたが、本館部分は当時の姿を良くとめています。



芦北町立武徳殿

9 郡築二番町樋門 1基

所在地 八代市郡築二番町字貳番町割 194-1 地先
年代 昭和13年(1938)
所有者 八代平野北部土地改良区
登録年月日 平成10年6月9日

概要

「郡築干拓」は、明治期に旧八代郡役所が行った干拓事業により造成されたもので、昭和11年の高潮により堤防決壊の被害を受けたため、昭和12年から補強工事が施されました。

郡築二番町樋門は、この時に新設されたもので石造3連アーチの樋門です。長さ14.2m、幅8.2mあります。



郡築二番町樋門

10 郡築三番町樋門 1基

所在地 八代市郡築三番町字参番割 169-1 地先、
171-1 地先
年代 明治33年(1900)
所有者 八代平野北部土地改良区
登録年月日 平成10年6月9日

概要

明治期に旧八代郡役所が行った干拓事業により築かれたもので、当初の姿で現存する八代平野部で唯一の石造樋門です。設計者は、当時熊本県技師で後に第五高等学校の教授になった川口虎雄です。長さ31.8m、幅8.3mの石造で10連アーチの美しい樋門で、アーチ部には赤レンガが使用されています。



郡築三番町樋門

11 熊本大学本部(旧熊本高等工業学校本館) 1棟

所在地 熊本市黒髪 2-39-1
年代 大正13年(1924)
所有者 国
登録年月日 平成10年9月25日

概要

創立時の本造校舎焼失後の再建校舎で、文部省直轄学校における鉄筋コンクリート造り校舎の初期のものです。

文部技師の長岡勇衛の設計によるもので、柱型の柱頭飾りなどに当時の流行をみることができます。



熊本大学本部(旧熊本高等工業学校本館)

12 熊本大学医学部山崎記念館（旧熊本医科大学図書館） 1棟

所在地 熊本市本荘1-1-1
年代 昭和6年（1931）
所有者 国
登録年月日 平成10年9月25日

概要

熊本医科大学の教授であった山崎正薫博士を記念したもので、鉄筋コンクリート造り2階建の図書館として建設されました。武田五一の設計で、外壁の意匠に特色がみられます。



熊本大学山崎記念館（旧熊本医科大学図書館）

13 ビーエス熊本センター（旧第一銀行熊本支店） 1棟

所在地 熊本市中唐人町1
年代 大正8年（1919）
所有者 ビーエス株式会社
代表取締役 平山敏雄
登録年月日 平成10年9月25日

概要

熊本市内最初の本格的鉄筋コンクリート造り2階建、地下1階の建造物です。

当時、多くの第一銀行の設計に携わった西村好時の設計で、第一銀行の建物としては、九州で最初に造られました。

本建築は、市民の保存運動の成果のひとつであり、「熊本まちなみトラスト」や所有者の保存協力の賜物です。



ビーエス熊本センター（旧第一銀行熊本支店）

14 明導寺本堂 1棟

所在地 球磨郡湯前町買元1955
年代 大正15年1月（1926）
所有者 宗教法人明導寺住職 藤岡孝教
登録年月日 平成10年9月25日

概要

本堂は、お寺には珍しい洋風の木造建築で、腰にレンガが使用されています。設計者は、当時同寺の住職の長男の「真月」で、同氏は昭和2年に25歳の若さで死去しました。

本堂は、妻入りで左右対称の建築で、玄関や窓枠などにゴシック風の技法が見られます。



明導寺本堂

15 高寺院毘沙門堂 1棟

所在地 球磨郡山江村大字山田甲 1640
年代 承応4年(1655・明暦元年)
所有者 宗教法人 高寺院住職 郡 眞賢
登録年月日 平成10年10月26日

概要

高寺院毘沙門堂は、この寺の奥の院に当たり急峻な374段の石段を登り詰めた寺山の山頂部に建てられています。

建物は、桁行3間、梁間3間、入母屋造りで、正面に向拝を設けた三間堂で、承応4年(1655)に建てられたものです。



高寺院毘沙門堂

16 球磨地域農業協同組合第26号倉庫(山江倉庫2号) 1棟

所在地 球磨郡山江村大字山田甲 1416
年代 昭和16年(1941)
所有者 球磨地域農業協同組合
登録年月日 平成10年10月26日

概要

この倉庫は、元山江村農業協同組合の発注により建造されました。桁行(間口)18、6m、梁間(奥行き)9、5m、2階建てで、正面には、穀物等の品質検査や荷造り等に便利のように、幅4mの庇が造られています。山江村の中心部にあり、町並を代表する建造物です。



球磨地域農業協同組合第26号倉庫(山江倉庫2号)

17 赤坂家石倉 1棟

所在地 球磨郡山江村大字山田乙 567
年代 昭和4年(1929)
所有者 赤坂りつ子
登録年月日 平成10年12月25日

概要

故赤坂貞治氏(現所有者の祖父)の設計で、山江村にある17棟の石倉のなかでも最も早い時期に建てられたものです。規模は、桁行6m、梁間4m、2階建て、屋根は瓦葺きとなっています。

この石倉は、集落を縦断する道路沿いにあり、町並を代表する建造物です。



赤坂家石倉

18～24 矢野家住宅（本宅）主屋、倉、味噌倉、納屋、表門、裏門、中門 7棟

所在地 阿蘇郡西原村大字河原2524番地

年代 明治3年（1870）ほか

所有者 矢野賢一

登録年月日 平成11年6月6日

概要

矢野家住宅は、主屋、倉、味噌倉、納屋、表門、裏門、中門の7棟がほぼ完璧に残されています。明治期の旧地主層の住宅を代表する建造物となっています。

河原地区を代表する建造物です。



矢野家住宅（本宅）主屋

25 矢野家住宅（新宅）主屋 1棟

所在地 阿蘇郡西原村大字河原2525番地

年代 昭和4年（1929）

所有者 矢野越子

登録年月日 平成11年6月6日

概要

矢野家新宅は、明治末に分家したもので、本宅の隣に位置しています。

河原村長を40年ほど務めた矢野数馬氏により、昭和4年に建てられたものです。隣接する本宅（明治期の建物）と比べると建物全体が高く造られていて、大正・昭和初期の住宅の変遷がよく分かります。



矢野家住宅（新宅）主屋

26～35 岡本家住宅主屋、馬屋、三階の倉、南の倉、表門、裏門、外便所、堀、石橋、浄化槽 10棟

所在地 菊池郡大津町森256

年代 天保11年（1840）ほか

所有者 岡本定廣

答申年月日 平成11年9月7日

概要

岡本家は、大友家の家臣を祖と伝え、その後福農し幕末に細川藩の士族となった家で、明治になると近郷の地主でした。住宅は、主屋、馬屋、三階の倉、南の倉、表門、裏門、外便所、堀、石橋、浄化槽の10棟がほぼ完璧に残されています。在郷武士、旧地主層の屋敷の構えが残されていて、貴重な建造物となっています。



岡本家住宅主屋

今回紹介する遺跡は、平成10年度から11年度にかけて行なわれた調査の中でまとまった成果が提出できる遺跡を選びました。そして、県より支援をおこなった各市町村の調査で、その成果が注目すべき歴史的意義を持つ遺跡を紹介しています。偶然ですが、今回紹介する遺跡は菊池川流域に存在するものが多いようです。

悠久の時を経て流れる菊池川は中流域と下流域の高低差があまりなく、明治時代にも玉名と山鹿を行き来する船がありました。このような交通の動脈としての役割とともに、静かで水量豊かな流れは、流域に豊かな沖積大地を育んできたことは言うまでもありませんが、菊池川の最大の特長は、幾く枝にも細かく別れた支流を持つことです。

これらの支流の末端にはさまざまな規模の谷が見られます。谷奥には湧水が見られるのが常であり、水田として利用されます。小鵬のひだのような菊池川の支流域は、一つ一つは細かくとも、まとめれば広大な耕地面積になります。

弥生時代に始まると思われる稲作は、水田なくしては語れません。当時の人々にとって豊かな恵みをもたらしてくれる菊池川流域の谷々は死守すべき土地だったに違いありません。弥生時代後期に菊池川流域に見られる、環のように囲む濠を持つ環濠集落の出現は、このような事情を物語っているようです。

巨大な耳飾り出土！

灰塚遺跡（球磨郡深田村）

平成5年度より始まった調査の最終年度にあたります。今回の調査では縄文時代早期の遺構が多数発見されました。検出された集石遺構22と土坑38は大きく円を描くように配置されており、縄文時代早期という人間の定住生活開始から間もない時期の“ムラ”の様子を垣間みることができます。出土遺物には耳栓（じせん）（耳かざり）や異形石器（特異な形で目的がよく分からない石器）などが見られます。縄文時代早期の耳栓は県下でも珍しく、大吉盆地の灰塚遺跡を含めて、2遺跡のみです。耳栓は直径が4cm、厚みが2.5cmほどあり、赤色の顔料が塗られています。耳栓の用途は栓ではなく、耳飾りと考えられています。誰が、どのように装着したかは明らかではありませんが、いずれにしても耳に付けるには巨大です。なお、平成11年度に報告書（縄文時代編）が出版されます。



出土した耳栓4点



遺跡全景（車より）

平安時代の井戸からも 「田」の墨書土器出土！

柳町遺跡（玉名市）

柳町遺跡の第4次調査は、弥生時代末から古墳時代初めと奈良時代から平安時代初めまでの二つの時期の遺構や遺物が出土しました。遺構としては、古墳時代の4世紀前半や平安時代初期の竪穴住居や井戸、平安時代初期の掘立柱建物、それにこれらの時期の水田跡や溝（水路か？）などが発見されています。特に、井戸の一つには木製の本杵が残っていて、当時の状況を伝えています。

これらの遺構に伴って、多くの土器や普通の遺跡では残らない木器が出土しています。中でも、須恵器という焼き物でつくった円形の硯（円面硯）や石帯（役人が位に応じて身につけるベルトの飾り）などは奈良時代から

平安時代初期にかけての当遺跡が港（当時の呼び名では「津」）の管理をする役所であった可能性を示唆しています。

なお、4世紀前半の井戸から出土した木製短甲の棒状留具の文字資料にある「田」の字が、今度は平安時代の井戸跡から出土した黒書土器にも書かれていました。「田」の字にはやはり特別な意味があるようです。

中世城跡に残る古墳時代の横穴群

城ノ鼻横穴群（下益城郡城南町）

熊本平野の南、緑川と支流の浜戸川に挟まれた微高地は宮地台地と呼ばれ、新御堂遺跡をはじめ、多くの遺跡が所在する台地です。その台地の最西端に位置する独立丘陵の斜面上に当遺跡は所在します。丘陵斜面の北側から西側にかけて数十基の横穴があったものと思われるが、後世の削平等により欠損あるいは消失し、現在は防護壁等の壁面調整により見る影もありません。また、遺跡が所在する丘陵上は、室町～戦国期の見方氏や甲斐氏の居城「隈庄城」の一部であり、今回の調査でも、登城道と思われる底幅2.5m程の堀切や井戸と思われる一辺1.5mの方形堅坑（深さ4m以上）が確認されました。



城ノ鼻横穴群（西より）

今回の調査は北側及び西側斜面の一部を行い、横穴墓は平成9年度の調査分3基も含め計11基確認されました。いずれも欠損し、完全な形では残存していませんでしたが、「コ」の字に屍床を配し、アーチ型天井部を有する形態でした。また、遺物の残存状況も悪く、1号横穴の埋土中から滑石製の管玉、須恵器製の胴部片、9号横穴の奥屍床部から須恵器短頸壺・蓋や鉄鏝9点がほぼ原位置を保った状態で見つかりました。

この他、丘陵頂部の縁辺部から、土坑1基や鉄製の小刀を副葬した箱式石棺墓1基が見つかり、横穴群以前にも当丘陵は墓域として利用されていたようです。

中世の主要道路跡検出

窟門寺原遺跡（玉名郡菊水町）

平成6年度の県営ほ場整備の際の調査に続く調査になります。遺跡は、菊池川左岸の低段丘上にあり、前回の調査では弥生時代中期の亮棺墓群や古墳時代中期の円墳等が発見されています。今回は、それらの続きの遺構は検出されませんでした。中世と思われる掘立柱建物1棟と底幅が2mのかなり大きな道路遺構が発見されました。当時にも大きな道路が存在したことが分かります。遺物は縄文時代から中世まで多量の土器が出土しました。



調査全景（西より）



遺跡空中写真（西より）

弥生時代後期の小型青銅鏡や 多数のガラス小玉発見！

ツスギ遺跡（鹿本郡植木町）

平成8年度に続く第3次調査になります。遺跡は植木町の大和丘陵の西北端部で、菊池川の支流と白川の支流がぶつかりあう分水嶺上にあります。

今回の調査では、縄文時代後・晩期と弥生時代後期の集落跡が発見されました。縄文時代は多数の三万田式土器とともに6軒

の竪穴住居が検出されました。また、祭祀に使用したと思われる特殊な形の土製品も数点見つっています。弥生時代は、11軒の竪穴式住居が見つかり、中からは桶の取椀に用いられた石包丁や、把手の付いたジョッキ形の土器などが多数出土しました。特に、注目すべき遺物として、銅鏡と多数のガラスの小玉が発見されたことです。銅鏡は内行花文の小型鏡で、24号住居跡の埋まった土の上に水平に置かれていました。ガラス小玉は、各住居跡の床面から検出されています。

今回の調査区は2次調査区と接しており、2次調査区の住居跡群が広がっていることが確認されました。



小型青銅鏡

緑釉陶器が出土

沼山津遺跡（熊本市）

縄文時代後・晩期と古代から中世にかけての遺構と遺物が発見されました。特に古代から中世にかけては掘立柱建物の柱穴が多数検出されています。道路部分の調査であったため、建物の配置は不明ですが、すでに竪穴住居が見られなくなったことを表しているようです。

遺物は古代の須恵器や土師器、中世の輸入陶磁器などを中心に500点以上出土していますが、その中でも、1点のみですが、緑釉陶器の破片が出土しています。この器の形はわかりませんが、当時は希少な器であることは確かです。熊本県でも出土数は稀です。遺跡の正確を知る大切な遺物です。



遺跡空中写真（南より）

古墳時代集落の集会所と思われる建物発見

東鶴遺跡（菊池市下河原）

東鶴遺跡は菊池市街地から南東約3kmの河原川が大きく蛇行する付近の、北から南に張り出す丘陵部先端の微高地にあります。県道整備事業のため平成10年11月から翌年3月にかけて調査を行いました。



遺跡遠景（南より）



集会所と思われる大型建物跡

調査の結果、縄文時代早期・後晩期及びの遺物包含層および奈良平安時代の遺物包含層と古墳時代の竪穴住居6軒を見つけることができました。ここでは、古墳時代の調査について紹介します。

竪穴住居は調査区の南西側に集中して見つかりました。北から南に張り出す丘陵先端が川に向けて舌状に張り出す部分に位置し、当時のムラの北の端付近を掘り出したものと考えています。大きな成果は、大型住居と住居内の残りのよい土器の発見でした。滋真の大型住居は、一部が道路予定地の外側ですが、一辺の長さが7.1mもあり、床面上の遺物が他の住居に比べて少ないことから、「住む」という目的とは少しちがった目的で建てられたのではないかと考えています。(たとえば集会所など) また、西側の3軒の竪穴住居は、遺物の残りが良く、「使っていた場所の近くにあったのでは」と思わせるような出土状態でした。整理が進んでいないため、はっきりとした年代の特定はできていませんが、5世紀代のものと思われる。この時期の菊池市周辺での住居の検出例は少なく、貴重な発見となりました。

貯水池から珍しい木製品！

鞠智城跡（鹿本郡菊鹿町）

20次の調査は、昨年度の貯水池跡の継続調査と南側の堀切門跡の調査を実施しました。ここでは昨年度の遺物の整理中に見つかった珍しい遺物について紹介します。

紹介する遺物は鞠智城跡の北西にある貯水池から、平成9年10月に出土しています。約3m堆積した水成粘土層から出たときは粘土が付着し、角材のように見えていましたが、粘土を落とすと切り込みがあり、珍しい形の木製品であることが解りました。

全長18.5cm、断面は長方形で幅5～6.7cm、先端と基部の一部は焼けて炭になっていました。他の遺物などの出土状況から類推すれば、池の近くで池の神に水が枯れないよう祈りを込めた祭りが行われた後、池に沈められたものでしょうか。



珍しい遺物

卑弥呼の時代の南郷谷の中心集落か？

南鶴遺跡（阿蘇郡白水村吉田） 白水村教育委員会調査

南鶴遺跡は阿蘇南郷谷の中央部に位置する弥生時代の集落遺跡です。昭和54年に地元の後藤秀隆氏により調査が行われ、住居跡とともに多量の土器が出土しています。今年度の



遺跡遠影（南より）



調査区空中写真（南より）

調査では、さらに詳しい集落の内容が明らかになってきました。まず、遺跡の南端と思われる地点から幅4m、深さ2mで断面がV字状をした濠が発見されました。この濠は今までの全国の遺跡の例からすると、集落を取り巻くように造られています。このような集落を環濠集落と呼んでいます。

環濠集落である南鶴遺跡の広さは、現在までの試掘調査や土器片の散布する範囲から推定すると、東西約500m、南北約700mの範囲であろうと思われます。この濠によって囲まれた中には多数の住居が建てられていたと考えられます。今年度の調査では約50軒の竪穴住居跡を発見しています。住居跡は一辺が5～8mの方形をしたものがほとんどですが、直径10mもあるような大型の円



丹塗土器

石包丁と鏃製石鏃

青銅製小型鏡

の集落からの出土は阿蘇郡内からは初めてです。

南鶴遺跡は出土した土器の形態から年代を推定すれば、2世紀末から3世紀末に存在したようです。まさに卑弥呼の時代です。

発掘調査は来年度以降も継続して実施される予定です。徐々に集落の内容が明らかにされることでしょう。

重さを計る分銅が出土

前畑遺跡（菊池郡旭志村新明） 旭志村教育委員会調査

遺跡は阿蘇北外輪の一部である鞍岳西麓に広がる台地上にあり、標高100m程です。前畑遺跡は主に2つの時期の集落が重なっていることが明らかになりました。

ひとつは縄文晩期の集落というよりはキャンプサイト的な場所と考えた方がいいようで、住居跡が1基のみでした。出土した土器は天城式から黒川式の各形式の土器です。



遺跡全景（上空北より）

の地域を中心として存在した官衙（古代の役所を中心とした空間）の周辺の集落として位置付けられるようです。当地域では古代合志郡小川郡の官衙の周辺とみられます。

吉野ヶ里遺跡に匹敵する遺跡の広がりか？

小野崎遺跡（菊池郡七城町蘇崎） 七城町教育委員会調査

小野崎遺跡は、縄文時代（後期）、弥生時代後期から古墳時代初頭、奈良、平安時代の遺跡が重なりあった複合遺跡です。縄文時代の遺跡は集落跡で、土偶が多数出土しています。



遺跡全景（東より）

そして、当遺跡の

主となる時期が奈良時代から平安時代にかけての集落です。壁に竈を造り付けた堅穴住居跡が35基以上、掘立柱建物10棟以上発見できました。方形の堅穴住居跡には一辺が約6mと約4mほどの2種があり、前者が時期的に古くなっています。また、家屋構造に大きな変化があったのか、掘立柱建物は堅穴住居よりは相対的に新しく登場し、平安時代末期まで存在しているようです。掘立柱建物の大きさは南北2間東西3間のものがほとんどでした。



石裂分銅

遺物としては、丹塗りの土師器や黒書土器、鉄製刀子（ナイフ）や重さの基準となる分銅などが出土しています。

前畑遺跡の奈良から平安時代にかけての集落は、出土遺物や遺構から推定すれば、一般の集落というよりは、当時



後漢鏡



鉄製釣針

弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡は、二重の濠で区切られた域内に土壇や石棺など多数（現在20基）の埋葬施設が確認されており、丘陵のほとんどが墓域であった可能性が強くなりました。これらの埋葬施設からは小型の青銅鏡が3面出土しています。このなかの1面は後漢時代の中国製鏡で、後漢鏡の完形品の副葬例は県内で初めてです。また、とても珍しい遺物として、鉄製の釣針2点が濠の中から発見

されました。これらの釣針はほぼ同型で実用にはむかないものです。出土した地点からは完形の土器もまともに見つかっており、釣針を用いた祭祀を行ない、その後、濠に廃棄した可能性があります。

小野崎遺跡の調査は次年度以降も継続して予定されています。なお、今回は触れられませんが、平成10年1～10月に七城町岩瀬に所在する小迫遺跡、また平成11年6～9月に七城町蘇崎に所在する赤北遺跡を県営は場整備に伴い調査しています。

小迫遺跡は4500㎡の調査区で、平安時代前期の20軒ほどの竪穴住居群とともに墨書土器が90点ほど出土しています。墨書の字としては「力」や「豊」などがあります。また、赤北遺跡は3000㎡の調査区で、縄文時代後期、三万田式の土偶や、平安時代前期の土器を焼いた皿状に凹んだ土坑が発見されています。

菊池平野の古墳時代の終わりを飾る大首長の墓か？

木柑子フタ塚古墳（菊池市木柑子） 菊池市教育委員会調査

木柑子フタ塚古墳は、菊池川を北の崖下に望む台地上に位置する古墳で、以前より県指定「フタツカサンの石人」のある前方後円墳として知られていました。ただ、墳丘はかなり削り取られており、正確な古墳の時期・規模・形状・石室構造などは不明のままです。今回の調査は現墳丘の南側にありますが、石室構造を除いて他の不明点はほぼ明らかになりました。

まず、古墳の周濠から出土した2000点を超える土器の形態から古墳の時期がほぼ6世紀後半と考えられます。また、墳丘の周囲には二重の濠が造られていました。内側の周濠の規模から墳丘後円部の直径は30m前後と推定され、墳丘全長は60～65m程度ようです。外側の周濠まで入れると、その総長は100m近くになります。内側の周濠の南側のくびれ部には後円部にある横穴式石室の入口に向かう墓道の一部が発見されています。

外側の周濠は墳丘後円部南側で方形の張り出し部が造られており、その周濠部からは完形の土器類がまともに出土しています。張り出し部で被葬者に対する祭祀が行なわれたのでしょうか。

今回の調査で最も注目される遺物として、蓋（きぬがさ）形の石製品2点と銀象眼された鉄製太刀鐔（つば）があげられます。蓋などの石製品が古墳に立てられるのは全国的にもほとんどが九州の筑後地方と肥後地方に限られ



遺跡周辺部（南より）



フタ塚古墳空中写真（南より）

考えられます。象眼は八つの窓のある卍形で、表裏および周縁にC字形の単位で刻まれています。象眼といえば国宝である菊水町江田船山古墳の太刀銘が有名ですが、象眼入りの鈿は熊本県では初めてです。

今回の調査成果は古墳時代後期の100m級の規模、通常は見られない貴重な遺物など、同時期の古墳と比較しても突出した内容をもっています。これはこの地に隣接する木柵子高塚古墳とともに、古墳時代後期に菊池平野に覇権をもった首長達の墓が築かれていたことを物語っているようです。

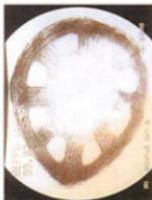
ます。そのなかでも、蓋は、かの有名な磐井の墓とされる岩戸山古墳と竜北町野津古墳群の姫の城・端の城古墳にのみ見られるのです。この事実



きめがさ出土状況（外側周溝）

が表す意味は大きいものと考えられます。蓋はいずれも周溝の中に倒れる形で出土しており、本来の位置ははっきりしません。

いま一つの貴重な遺物は銀象眼の鉄製太刀鈿です。出土地点は内側の周溝の墓道入口部分ですから、石室内にあったものが、盗掘の際にかき出されたものと



鈿のX線写真

縄文時代の生活を知る貴重な住居跡を多数検出

外牧道跡（大津町外牧） 大津町教育委員会調査

道跡は試掘・確認調査の結果に基づき設計変更が行われ、道跡を削平してしまう部分について本調査を実施しました。本調査地点は19カ所であり、AからSの名を付けています。それぞれの調査区から遺構・遺物が発見されましたが、特に3地点が道跡としてまとまっていた。R・S区には6基の縄文時代の住居跡が、また、H区およびK・L区には6基の古墳時代の住居跡が確認されています。3つの地区の周囲にも多数の住居跡が残されていることが予想されます。

R・S区の6基の住居跡は出土した土器の形態から見るとその中心は縄文時代後期前半にあたります。型式名でいえば北久根山式から辛川式と呼ばれる型式ですが、一番多く見られるのは北久根山式です。住居跡は直径2~4mほどのやや小型の円形をした竪穴式住居になっています。住居の中央には地面に直接掘込んだ炉がみられ、焼土がつかっていました。

H区およびK・L区の6基の住居跡はやはり出土した土器の形態から古墳時代でも5世紀代に位置付けられるも



縄文住居道跡検出状況



縄文住居跡完掘後

のです。住居は一辺が4mほどの方形をしています。深さは縄文時代のそれよりも深く、40～50cmを計ります。

遺物は住居跡のなかや遺跡の上をおおっている包含層のなかから多数出土していますが、まだ未整理のため、多くを述べることはできません。平成12年度には報告書を発行する予定です。



縄文時代住居跡群

天水町に大前方後円墳！ 被葬者は海上交通の覇権を握った人物か？

大塚古墳（玉名郡天水町立花） 天水町教育委員会調査

金峰山から西に広がる裾野は、天水町で低丘陵となり、有明海で遮られます。この低丘陵の一つには従来から4基の円形古墳（経塚古墳・小塚古墳・経塚西古墳・大塚古墳）が知られており、この4基の古墳のうち3基は、県下でも10指に満たない直径50m級の円墳に含まれていました。また、経塚古墳は昭和42年に玉名女子高校の帆足文夫先生により調査されており、阿蘇凝灰岩製の精美な舟形石棺とともに棺の中からは青銅鏡、装身具の碧玉製玉類、鉄剣など豊富な副葬品が発見されています。このような経緯から、平成10年に4基まとめて県の指定史跡となりました。



大塚古墳全景（南より）

今回の調査は、天水町の古墳群の史跡公園化計画のなかで、大塚古墳の公園化決定に基づき、整備に必要なデータを得るためのものでした。調査の結果は目を見張るものがありました。その中でも重要な点をあげれば、次の4点になります。

- (1) 前方部と後円部を結ぶ「くびれ」部分の石組みが明白に確認され、前方後円墳であることが判明したこと。これにより後円部直径が約54mであることがわかりました。前方部の規模はまだ不明ですが、墳丘部分のみで100m前後であることが予想され、県下でも最大級になります。
- (2) 後円部の頂上に造られたこの古墳の主人である被葬者の埋葬施設の他にも、墳丘斜面や裾部、くびれ部などに十数基の箱式石棺を中心とした埋葬施設が存在すること。墳丘の頂上の平坦部に複数の埋葬施設が確認される例はあるが、様々な場所にこれほど多数見られるのははじめてです。当時の社会構造や葬送観念の肥後地方における特徴を知るうえで貴重な例となるかもしれません。
- (3) 後円部頂上にあるこの古墳の埋葬主体部には舟形石棺が使用されていたこと。阿蘇凝灰岩製のもので経塚の舟形石棺と共通することがわかりました。



南側くびれ部

- (4) この古墳の墳丘が4m以上の盛土で造られていること。墳丘を断ち割るように深く掘削したトレンチの調査で、4m下で旧地表面を検出したことで明らかになりました。また、盛土とともに掘石や斜面に葺石を張り付け、壺形の土輪を立てていたこともわかりました。

前方後円墳は通常、その地域の首長墓と考えられており、広い耕地面積のある平野に面した立地をとる例がほとんどです。その中でも全長が100m級の前方後円墳となると、県下でも4基ほどであり、大塚古墳で5例目となりそうです。しかも、大塚古墳は

平野のほとんどない天水町に存在する大前方後円墳ということになります。この古墳を造り得た被葬者にどのような経済力あるいは権力があったのでしょうか。可能性の一つとして菊池川の入口を押さえる海上交通の要衝部にあることがあげられます。今後、発掘調査の整理研究を通して、課題の究明が急がれます。

掲載道跡位置図



鞠智城八角形建物復元！



復元された八角形建物



八角形建物発掘後（柱はわかりやすくするため）

鞠智城跡の発掘調査で最大の発見とされる八角形建物跡の往時の姿が復元されました。復元設計は北野 隆先生を中心におこなわれ、高さ約16mの三層構造、本瓦葺き屋根をもった1300年前の重厚な勇姿が現われました。今後、整備される鞠智城のシンボリック的存在になることでしょう。同時に、鞠智城に駐屯した兵の兵舎も復元されています。兵舎内には、小規模ながら出土遺物の展示もおこなわれています。

鞠智城の発掘調査は昭和42年度の第1次調査に始まり、平成11年度に第21次調査を実施しました。八角形建物跡は平成3年の長者原地区調査の際に、2棟検出されました。八角形建物跡は、全国の古代山城では初めての発見でした。建物は南北に並んで発見されており、どちらも地面に穴を掘って、柱を埋め込んでおり、心柱の周囲には八角形の柱列が巡っています。北側八角形建物跡では二重に、南側八角形建物跡では三重に巡っていました。今回の復元は、南側八角形建物跡をもとにしています。

整備事業は、まず平成6年度から4カ年計画で、遺構が集中する内城地区を公有化することから着手し、同時に整備検討委員会で、鞠智城復元計画の検討を行いました。平成10年度から南側八角形建物跡の復元工事に着手しました。検討委員会はこの建物跡を「鼓樓」に位置づけています。鼓樓とは連絡用と時を告げるための太鼓を置いた建物のことです。現代の鼓樓からは9時・13時・15時に再現された太鼓の音が鳴り響いています。

なお、復元建物は検出した遺構を保存するために、元の場所から北側にずらした箇所に築造しています。

11 教 教文

③ 011